

太平洋戦争後の日本海北部沿岸における砂丘荒廃地の状況と周辺住民の生活環境

林業試験場 森林環境部 環境グループ 真坂一彦

研究の背景・目的

かつて日本海沿岸の海浜には巨大砂丘が形成され、飛砂によって周辺住民を苦しめてきました。現在では海岸林造成が進んだため飛砂害はほとんどなくなり、飛砂害の実態が忘れられようとしています。本研究では飛砂害を体験している世代に聞き取り調査を行い、当時の生活環境を社会科学的に評価することを目的とします。

本研究は、第43回（平成26年度）三菱財団人文科学研究助成による助成金を受けて行っています（H26.10～H27.9）。



研究の内容

太平洋戦争後も飛砂害がみられた江差町柳崎と秋田県由利本荘市西目を対象に、郷土史家および老人に、海浜地域における戦中・戦後の生活環境について聞き取り調査を行いました。証言の一部を青枠に記します。

北海道江差町（柳崎）



・砂浜なのでイワシ漁が行われた。イワシ粕製造の燃料は山からの薪を購入した。砂丘が発達したのは牛の放牧による（C.M., 昭6生）。

・河口が浅く、冬季間、飛砂で埋まる。昭和45年、大雨によって洪水が発生したため、現在の柳崎の土地に移住（T.M., 昭2生）。青年団が水戸を切った（C.M.）。水戸口は約15年で元の位置に戻る。

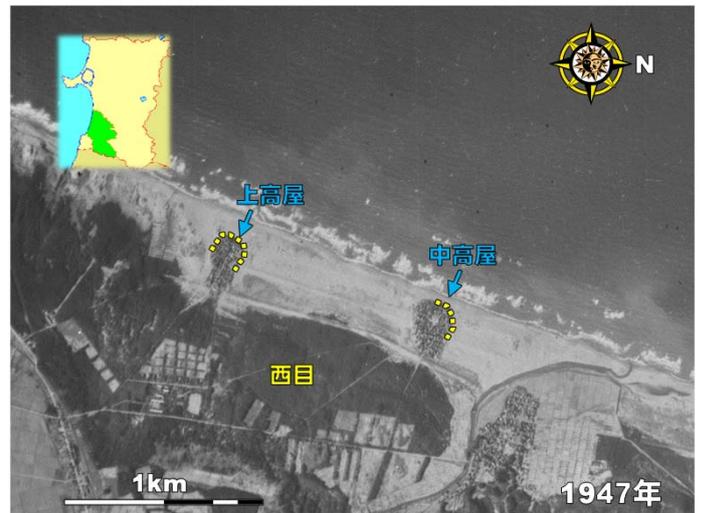
・昭和30年代まで、水田に堆積した砂を捨てるために生徒が休学した（T.M.; C.M.; C.H., 昭2生）。

・冬期間、国道から風下側に降りて、上級生が風上側になるように隊伍を組んで通学した。上着のポケットは砂だらけになった（C.M.; S.N., 昭14生）。

※ローマ字は名前のイニシャルを表す。

田畑の砂の除去だけでなく、洪水の原因を取り除く苦勞もありました。

秋田県由利本荘市（西目）



・上高屋はママ（塊？）と呼ばれる、高さ3mほどの土塁に囲まれる。土塁の成立年代は不明だが、おかげで飛砂害はなかった（H.W., 昭14生）。

・上高屋では戦時中に製塩をした。塩田もあった。日常の煮炊き・暖房用の燃料は浜の流木で間に合った。マツ林では落ち葉掻きをして燃料として売っていた。木は伐らなかった（H.W.）。

・中高屋の江戸時代の地名は「高野塩屋」。製塩の記憶はない。日常の煮炊き・暖房用の燃料は浜の流木で間に合った（T.K., 昭28生）。

・海に突き出た高台にあるが、土塁はなく、吹きさらし。北西側の家は、すり鉢状の深い穴を掘って家を建てた。約30年前まで穴居があった（T.K.）。

今後の展開

戦前からの海浜の荒廃史を踏まえて、戦後の生活環境を評価する予定です。

居住環境の違いが飛砂害の受けやすさの違いに大きく反映していました。

